

町村週報

(町村の購読料は会費)
(の中に含まれております)

3216号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 横田真二：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<https://www.zck.or.jp>



しのしま まんよう 篠島より万葉の丘から夕景の松島 (愛知県南知多町)

もくじ

● ● ●
随 情 活 活

想 報 動 動

- 荒木会長が小倉(じ)も政策担当大臣として
「(じ)も家庭庁」設置にあたり意見交換……………(2)
- 中山間地域フォーラム設立16周年
全国町村会都市・農村共生社会創造合同シンポジウム
「新しい中山間地域を考える」地域からの提案」を開催……………(4)
- 国政情報
「いちゆいゆんたんざ 創造・協働・感動」の村づくり……………(11)
- 沖縄県読谷村長 石嶺 傳實……………(11)

コラム

「農」の世界を都市住民に近づけるために

農業ジャーナリスト・明治大学客員教授 榎田 みどり

11月から、柴田昌平監督のドキュメンタリー映画「百姓の百の声」が東京都内で封切りになる。今後、自主上映を含めて、各地で上映予定だ。先駆けて試写させていただいたが、いろいろ考えさせられた。

まず、農業に関心がある柴田監督でさえ、最初は農家の言葉が異国語のように聞こえたという現実。「その国に至る道が、これほど遠いとは思ひもなかった」という映画の冒頭のセリフが、柴田さんの衝撃を如実に物語っている。

食べている限り、誰の隣にも「農」はあるのに、なぜ消費者にとって、「農」の世界がこれほど遠いのか。そこに、今の日本の食と農の構造が凝縮されているとを感じる。

また、映画には大規模農業法人から「稲作の最後の巨匠」と言われる80代の家族経営の農家まで、実に多様な農業者が登場し、彼らのリアルな言葉をすくい取っている。

今の「成長産業化」の旗手と言われる大規模法人にも、離農が増加する中での「担い手」としての重圧があり、小規模農家にも直面する悩みがある。そして意外にも両者には、共有している思いもあり、長期的なスパンで、そ

れぞれが地域や農業の課題と向き合っている。大手メディアで農業が語られる際、「農業の成長産業化」の花形、あるいは「高齢化・後継者不足」という厳しい農業問題に直面する農村、あるいは「大規模農業」vs「小農(家族経営)」という対立構造が報道されたりすることが多い。

記者としての自戒を込めて言っと、俯瞰して単純化したほうがわかりやすい(本気で単純にそう考えている記者もいるかもしれない)のが原因と思う。しかし現実には、小規模も大規模も非農家も複雑に絡まり合い共生しているのが地域である。

その現実を都市住民にどう伝えるか。食品の値上げが続き、食料安保に都市住民の関心が高まる中、農産物という「モノ」の発信だけでは伝わらない農村や農業のリアルの発信のあり方を考える上で、今が絶好のチャンスではないかと思う。

冒頭の映画は最後に「さて、私たち(消費者)はどうする?」と問いを投げかける。逆に私は農村に「さて、私たち(農村・農業者)はどうする?」と問いかけた。

写真キャプション

万葉時代の歌にも篠島のことが詠まれており、その歌碑・句碑が万葉の丘に建てられている。この丘から西方の海上に浮かぶ「東海の松島」を影絵のように映しながら沈む夕日は、「日本の夕日百選」にも選ばれる。古代から変わることなく観る者を感銘させる名勝だ。食事は伊勢湾の絶品穴子が有名である。